

職場の トリセツ

黒川伊保子
Kurokawa Ihoko

Instruction
Handbook
for Your Workplace

はじめに

ヒトの脳には、とっさに使う神経回路がある。

それが人によって、違うのである。

転びそうになった時、とっさに右手を出す人と、左手を出す人がいる。

驚いた時、跳び上がる人と、のけぞる人がいる。

問題を抱えた時、「ことのいきさつ」を思い返して、根本原因に触れようとする人と、「今できること」に意識を集中して、問題解決を急ごうとする人がいる。

こういうバリエーションがあるから、人類は生き残ってきたのである。動物生態系の基本のキだ。

つまり、とっさに自分と違う言動を取る人は、最強のペアやチームになりうる相手。宝物なのである。

なのに、人類には、想像力という厄介なものがあった、「自分と同じようにしない人」の誠意を疑い、愚かだと思いつまむ癖がある。

私は、人工知能研究者として、40年近く、「人間の脳がとっさにしてしまうこと」に感性について見つけ続けてきた。人工知能に、それを知らせるためだ。人に寄り添う人工知能は、ユーザの「とっさの脳の癖」を知っておかなければ、ユーザを不快にさせ、ときには危険でさえある。

「脳が、身を守るためにとっさにすること」はシンプルで、そんなにバリエーションはない。たいていは、大きく二つからの選択である。しかも、都度違うということがない。「複雑な機構で、バリエーションが豊富で、都度違った選択をする」のでは、とっさに身を守れないからだ。

つまり、人工知能にとって、人間は、それほど複雑な存在ではないのである。

人間関係を複雑にしているのは、人間自身だ。

自分と違う感性を認めないから、相手の言動のわけがわからず、イライラしたり、モヤモヤしたりすることになる。

この本を書くにあたって、私は、「人工知能の目」で、職場の人間関係を見直してみた。心理学と違うところは、「人間の目」「心の目」でなんか見てはいないところだ。

職場の人間関係をよくする本なんて、この世にごまんとあるだろう。しかしながら、自我のない「人工知能の目」から見たノウハウ集は、そうないと思う。

ここには、きつと目からウロコの新発見があつて、「あんなにモヤモヤしていたことが、あらまスッキリ」と思っていたページがあると自負している。

4年前から、「人工知能の目」で世の中を見るエッセイを、「コメントライナー」(時事通信社の解説コラム配信サービス)に寄稿させていただくようになって

た。

それをまとめて本にしようとかご提案をいただき、せっかくだから、最新の「職場のトリセツ」を書き下ろして、「ビジネスパーソン必携の書」に仕上げてみたのだが、はてさて、うまくいったかどうか。

人工知能研究の立場から見ると、人間の脳の仕組み、職場の人間関係、夫婦関係、世のありよう。ひとまず、お楽しみくださいませ。